

池上彰著 「この社会で戦う君に『知の世界地図』をあげようー池上彰教授の東京工業大学講義ー」
文藝春秋 2012 年 11 月 15 日刊を読む

「学際的教養」のススメ

1. (1) 東京工業大学で教えることになりました池上彰です。
(2) フリージャーナリストとして取材に飛びまわっていた私が、なぜ東工大教授のオファーを受けたのか。講義の前に、まずは私の問題意識から話しましょう。
2. 3・11、科学技術の敗北を超えて
 - (1) きっかけは、2011 年の 3 月 11 日です。大地震や大津波の危険性を専門家たちが警告していたにもかかわらず、なぜそれが政治や行政、そして東京電力の安全対策に生かされなかったのか。科学や技術が、ある意味で敗北したことを意味するのではないか。そう考えたのです。
 - (2) また、東京電力福島第 1 原子力発電所で事故が発生した後、記者会見やテレビで解説する専門家たちの発表や説明が、視聴者や読者にとって理解不能であったのは、どうしてなのか。専門家たちに、「わかりやすい伝え方」の能力が欠如していたからではないか。
 - (3) さらに、東工大の卒業生だった菅直人総理は、危機に際して、十分な指揮が取れなかったのはなぜか。そこに、理科系特有の「狭い視野」に陥った問題がなかっただろうか。そのような感慨に捉われました。
 - (4) 理科系の専門家の発言が、文科系の国民に伝わらない。世の中が、あまりに「文科系」と「理科系」に分かれてしまい、大きな断層が生じているのではないか。これは、今後の日本にとって看過できない問題ではないか。
 - (5) 私に、こんな問題意識が芽生えていたときに、「東工大の学生たちに、社会科学的な教養を身につけるお手伝いをしていただけませんか」とのお誘いをいただき、決断したのです。
 - (6) あなたたち東工大の学生たちは、やがて科学者や技術者となって、日本を支える人材です。あなたたちに、視野の狭い専門家になって欲しくないと考え、私はこの教壇に立つことにしたのです。
3. 「正しいこと」を自分で見つける
 - (1) さて、では大学で学ぶ意味とはなんでしょうか。それは、一言で言えば、「教えられるのではなく、自分で学ぶ」ことだと思います。
 - (2) あなたたちは、高校まで、「正しいこと」を教えられてきたはずです。これから大学では、「正しいこと」を自分で見つけていくことが求められるのです。
 - (3) 高校までの学習課程には、学界の多数派が「正しい」と認めた内容が盛り込まれています。学界で定説になっていない理論や学説は入っていないのです。
 - (4) しかし、大学や大学院では、最先端の研究に触れることになります。その中には、そもそも多数派理論が未形成の分野の学問もあります。多数派になっていない理論を研究している先生もいます。こうした理論や研究に接することができるのが、学問の醍醐味なのです。
 - (5) となると、教室や研究室で教わることを、そのまま頭から信じ込んだり、記憶したりという

ことはすべきでないでしょう。「これは仮説にすぎない」と考えながら聞くことも必要でしょう。物事を批判的に受け止めること。これが大切なのです。いま池上が話していることも、そもそも批判的に受け止め、自分なりに考えてみる習慣を身につけてください。それがやがて、あなたを研究者に育てることにつながります。

- (6) 日本の大学の先生たちは、教育より自分の研究を大切にしがちだと批判されます。学生にしてみれば、「なんで教育にもっと力を入れてくれないのだ」と不満に思うかもしれません。その気持ちはよくわかります。私も学生るとき、同じ思いがしました。
- (7) しかし、大学というのは、研究者の“後ろ姿”を見て学んでいくという方式をとっています。先生の講義を受けることを通じて、「学び」や「研究」の手法を自ら盗み取り、自分の力にしていくことが求められるのです。
- (8) 多くの大学の先生は、教えるプロではありません。そもそも教員免許がいらないのです。その点で、小学校から高校までの先生たちとは異なるのです。その点を承知しておきましょう。東工大の先生たちは、あなた方を「研究者のタマゴ」として遇することが多いはずなのです。

4. 理系・文系の境界を越えて

- (1) 大地震や原発事故を経験して、私は「学際的教養」の大切さを痛感しています。狭い専門分野に限定された知識の限界を感じます。
- (2) 学者も研究者も技術者も、社会と無縁では生きられません。地震や津波の研究を進めても、それが人命を救うことになれば意味がありません。原子力発電の研究開発は、安全性の向上に寄与するものでなくてはなりません。社会の中で、科学や技術が果たす役割を考えていかなければならないのです。
- (3) あなたたちの中には、将来、企業に就職する人もいるでしょう。企業の中での研究者、技術者は、コストとの戦いにも直面するはずです。原子力発電所の建設でも、安全性とコストとの関係が問われました。コスト削減のために安全性を損なってもいいのか。この問題に直面したとき、あなたは、どんな判断を、下すべきか。いまから考えておいてほしいのです。
- (4) ハイゼンベルクの不確定性原理の誤りを見つけ、「小澤の不等式」を生み出した名古屋大学の小澤正直教授は、実は東工大の御出身です。在学中、東工大の哲学の先生の研究室に入り浸ったそうです。その結果、量子力学の研究の道に進み、世紀の発見をされました。東工大では哲学の勉強もできるのです。これが東工大のユニークなところであり、誇れる特徴なのです。
- (5) 私が所属する東工大のリベラルアーツセンターとは、そのような教養を学生諸君に身につけてもらうための組織として発足したのです。

P7 ~ 11

5. 個人と企業、社会の「幸せな関係」をさがそう

- (1) 皆さんは、イチローの決断をどう受け止めたでしょうか。日本で活躍した後、シアトル・マリナーズで活躍して一番になりました。しかし彼は、一度はメジャーリーグで一番のチームで勝負したいと考え、ニューヨーク・ヤンキースへ移ったのです。
- (2) 劇的だったのは、移籍直後の最初の試合がマリナーズ戦だったことですね。しかもマリナーズの本拠地球場でした。日本だったらどうでしょう。阪神甲子園球場での阪神対巨人戦に、巨人へ移籍したばかりの元阪神選手が出場したとしましょう。観客はどのように迎えるでしょうか。拍手で迎えるでしょうか？それともブーイングとなるのでしょうか。イチローはマリナーズのファンからスタンディング・オベーションで迎えてもらいました。声援、祝福を送ったわけですね。私は「こういう風土の国は強いなあ」と感じました。

- (3) ^{ひるがえ} 翻って日本の産業界。韓国のサムスンへ移籍した技術者が帰国して迎え入れる時、日本の企業はどのような受け入れ方をするでしょう。「ライバル企業ではどうだったんだい」「よく頑張ったね」と、皆で受け入れてくれるような企業であってほしい。またはライバル企業へ祝福して送り出してくれるような会社であれば、再び戻った時に「また頑張ろう」と思ってくれるかもしれません。個人と企業、社会の「幸せな関係」とはどうあるべきなのかを考えてほしいと思います。この「幸せな関係」を築けない企業は、グローバル化の中で衰退していつてしまうのだと思います。
- (4) そういう中で、皆さんがよりよい生き方を見つけて下さい。

6. 「現代世界の歩き方」

- (1) 文科系の世界を歩いてきた私が、まさか東京工業大学で教えることになるとは、想像もしませんでした。実に刺激的な体験をしています。
- (2) 東京・目黒区にある大岡山キャンパスは、桜の古木の並木があり、春の入学シーズンには、それはそれは見事な桜吹雪となります。私も新入生の気分で大学に通い始めました。
- (3) 東工大で一番広い教室は 260 人収容です。このため履修希望者をこの数だけ抽選で絞ることになりましたが、いつも教室はあふれました。講義の後は質問の学生が列を成しましたが、東工大以外の学生も質問の列に並んでいました。
- (4) 教えてみて、東工大の学生には 2 種類いることを知りました。文系、理系のどちらの科目もよくできた上で理系を選んで入ってきた学生と、文系が苦手なので理科系の大学に進んだタイプがいるのです。
- (5) でも、前期の講義が終わった後、「社会科が苦手な理系を選んだのですが、講義を聴いて社会科がすっかり好きになりました。今後どんな勉強をしたらいいのでしょうか？」と尋ねる学生が現れたのは、教師冥利に尽きるものでした。
- (6) 東工大の前期では、1 年生向けに「現代日本を知るために」と題した講義を、2 年生以上の学生を対象には、本書のもとになった「現代世界の歩き方」と題する講義を受け持ちました。
- (7) 「現代世界の歩き方」は、いつも理系の専門分野を学んでいる学生たちに、現代世界の構造や成り立ちの基礎を知ってもらうことを主眼目にしています。自分たちの周りの社会がどうなっていて、どのように動いているのかを知ることは、現代に生きる者にとって必須の知識だからです。
- (8) 東工大の学生は、将来技術者や研究者の道を進む人が多いことも考慮して、企業のあり方や技術者の生き方・働き方を考えてもらう内容も盛り込みました。

P251 ~ 254

[コメント]

高校卒業後に 8 割近くの人々が大学・短期大学・専門学校などいわゆる高等教育機関に進学するという「大学の大衆化」が日本にも到来。理系の最高峰とも言われた東京工業大学の「現代世界の歩き方」の講義が池上先生によって行われ、その速記録が本書の形で刊行されたことは喜ばしい。現代世界で求められる「学際的教養」とは何かを高校生、大学生だけではなく、社会人、とりわけ人にもものを教える立場にある方々は本書によってしっかりと学んで頂きたい。池上先生の最近の一連の著作を一気に、また、丁寧に読むことで「新聞」記事、世の中の動きがよくわかるようになる。